

学部長挨拶

田中 一

ただいまご紹介いただきました田中のございます。この社会と情報のシンポジウムも、だんだん回を重ねて第4回目になりましたので、ご出席の方々の多くはこのシンポジウムの主旨をよくご理解いただいているように存じます。私達も最初のうちはどのようなシンポジウムにするかたいへん迷いました。社会情報学というのはまだ学として形成されておられませんし、しかもその対象とする社会情報現象は極めて多岐にわたっております。このような場合には、社会と情報に関して優れた仕事をしてこられた方々からこれを聞かせてはとお考えのお話を伺い、そのお話から示唆を得てだんだんに考えていくのがいいんじゃないかと考えました。その上でこのような試みを始めたと思っております。

今までに外部から非常に多数の方がおいでいただきました。今年も佐和さんと長尾さんというお二人の報告者の上に討論者として土屋さんをお招きすることができました。外部から報告者として呼び申して来ていただいた方はこれでちょうど10人になるかと思えます。

今までもそれぞれに皆さん方から大変示唆に富んだお話を伺いました。4回目となりますと、昨年も申し上げましたんですが、このシンポジウムの伝統のようなものが次第に作られて来ているように思います。まだはっきりした形をとってはおりませんけれども、第一に挙げられるのは、それぞれの分野でまとまったご自分の仕事をなさった方に来ていただいているということです。このような方から社会と情報に関する基礎的な概念をめぐって、いろいろとその報告を伺うという、そういうふうな内容がこのシンポジウムの特徴になってきているかと思えます。

考えてみますと社会情報学というものは、例えて言えば、理学や工学というような、そういう範囲の広い包括的なもののような気がいたします。理学の中にはいろいろな分野がありますし、工学の中にもいろいろな分野があります。しかしながら、だからといってまったくなんの原理もなく、理学が各分野の一つの集合の名称になっているということはありません。理学は例えば自然現象に関する事実の真理性を評価の基準とした分野とも言えますし、工学は有用性というものを評価の基準にした一つの分野であると、そういうふうにも考えることもできます。社会と情報に関するいろいろな議論をいままで多く伺いましたが、これらを通じて、例えば理学における真理性や、あるいは工学における有用性のように、その分野における積極的な仕事の評価基準のようなものが社会情報学に関して現在得られているかと言うと、それは必ずしもそうは言えないと思えます。社会情報学が個別科学として成立すること、それが今後の課題ではないかと思っております。

今回も狩野さんをはじめ研究委員会の方々の随分なご努力で、佐和さん、長尾さん、土屋さんをお招きすることができました。いままでと同様示唆に富んだ報告を聞き教えられるところの多い討論が展開され、私達の大変な勉強になる時期がまた再びやって来たことを弾ませております。よろしくお願いいたします。これをもって私の挨拶といたします。